『封神演義』の成立

――『西遊記』所収詩詞との比較より見た――

荒木　猛

〔抄　録〕

明代に現れた神怪小説の代表作に、『西遊記』と『封神演義』がある。この両作品はいろんな点で類似するが、中でも注目されるのは、作中に挿入された詩詞に共通するものが少なからず見られることである。このことは、いずれかが原作で、いずれかがそれを借用した為と考えられる。

拙論では、ストーリィの展開の中で、挿入された当該詩詞の妥当性を検討した結果、『西遊記』中の詩詞が原作で、『封神演義』のそれはそれを借用したものであるとの結論に達した。

キーワード　神怪小説・『西遊記』・『封神演義』成立時代

はじめに

『西遊記』も『封神演義』も、ともに神怪小説である。この両小説を通読してみると、どちらにも哪吒（ナタ）とか二郎神とかという神仙が登場するし、作中に使われている詩詞にも、よく似たものの使われていることが相当見られる。では、『西遊記』と『封神演義』のどちらが早く成立し、どちらにその影響を与えたのだろうか。

まず『西遊記』だが、現存する最古の刊本は、日本内閣文庫に蔵されている万暦二十年（一五九二）刊行の世徳堂本である。従って遅くともこの万暦二十年までには『西遊記』は成立していたことは確かである。

ところがこれに対して、『封神演義』の成立はいつなのか、これまで研究者によって様々な説が唱えられてきていて、この小説が『西遊記』より前に成立したのか、それとも後に成立したのかはっきりしていないのである。

小論は、『西遊記』と『封神演義』に共通する詩詞を比較検討することによって、この両作品の成立の前後を考察しようとするものである。

尚、小説成立の時期の考察には、当然小説作者や出版元の考察は必要ではあるが、本論中でも触れる通り、本考では敢てこれらの考察は研究範囲に含めないこととした。

結論から言えば、小論では、『封神演義』の成立は、恐らく『西遊記』成立の後と考える方が妥当であるとするものである。

一、

『封神演義』の成立は、『西遊記』のそれよりも早く、『西遊記』には『封神演義』から受けたと見られる影響があると唱えたのが柳存仁氏[1]である。しかし、この説は妥当であろうか。

柳説の当否をしばらくおくとして、『西遊記』と『封神演義』の成立の前後を知る手立てとして何があるかを考えてみたい。

まず第一に考えられるのは、この両作品の作者が判れば、その成立の前後も、ある程度わかるだろうというものだが、実のところこの両作品についてこれまで種々論ぜられてきているが、ともに定説を見るに至っていない。

たとえば『西遊記』は、魯迅の『中国小説史略』や胡適の「西遊記考証」以来、いまだに本国中国では呉承恩作者説が盛んであるが、その唯一の根拠が、『天啓淮安府志』巻十九に呉承恩という人の著作物として、『射陽集』『春秋列伝序』と並んで『西遊記』の三字が見えることである。しかし、『明史』芸文志の基となったとされる黄虞稷の『千頃堂書目』巻八には、地理類の書としてこの呉承恩の『西遊記』が挙げられている。これは明らかに呉承恩が西方のどこかに旅行した時の紀行文と考えるべきであって、とても現存する小説『西遊記』と同一の書とは考えられない。

もし小説『西遊記』の作者が呉承恩でないとすれば、現在のところこの小説の作者は不明ということになろう。

一方『封神演義』の作者はと言えば、まず李光璧「封神演義考証」や柳存仁「封神演義作者陸西星」以来、明の道士の陸西星が作者であるという説があって、その根拠は、清無名氏の『伝奇滙考』（現存の『曲海総目提要』巻三十九）の「順天時」という伝奇について述べた部分に、「按ずるに『封神伝』は、元の道士陸長庚の作であるが、確かかどうか分らない」とあるに依っている。その後、元の道士は明の道士の誤りで、陸長庚の長庚は字で、本名は陸西星、号は方壺外史。興化（揚州）の人だということが判明した。

これとは別に、許仲琳作者説というものがある。これは、我が国内閣文庫に蔵する明刊本『封神演義』（舒載陽刊本）の第二巻巻頭に、「鐘山逸叟許仲琳編輯」とあることからで、この許仲琳も『封神演義』の作者の候補の一人と考えられている。

更に、許仲琳原作・李雲翔改定説なるものがある。それは、先に挙げた舒載陽刊『封神演義』の巻首に李雲翔の序があり、それには「余友舒冲甫自楚中重資購有鐘伯敬先生批閲『封神』一冊、尚未竟其業、乃托余終其事。余不愧続貂、刪其荒謬、去其鄙俚云々」（私の友人の舒冲甫が楚より大枚をはたいて鐘伯敬先生批閲の『封神』一冊を買ってきた。しかし、それは未完成の作品だったので、彼は私にその完成

を依頼した。私は自分が筆を継ぐことによって原作を損いかねないと思ったが、自らの不才を愧じることなく、原作のうちのでたらめな所や下品な箇所を刪って、云々）とあるによっている。

ここで言う舒冲甫とは、蘇州金閶でこの『封神演義』を出版した出版元のことである。また鐘伯敬とは、明末の竟陵派詩文のリーダーの鐘惺のことである。孫楷第氏は、『日本東京所見小説書目』（一九三二年）で、舒冲甫が楚よりこの小説を購入してきたと序で言うのは、鐘惺が竟陵つまり楚の人だったからであろう、しかし、どうやら作者はこの序を書いた李雲翔だろうとし、ここでは許仲琳原作・李雲翔改定ではないかと推測している。ところがその翌年に出版された同氏の名著『中国通俗小説書目』巻五〝封神演義〟の条では、先に示した『伝奇滙考』の記事を示した上で、陸西星作ということも大いに考えられるとして、孫氏の考えがゆれている。

以上、少々長々と『封神演義』の作者について述べてきたが、現在までの所、陸西星にしろ、許仲琳にしろ、更に李雲翔にしろ、未だ彼等の生涯を知る手懸りはほとんどなく、『封神演義』の作者は、彼等のうちの誰かか、それとも別の人なのかも判らないのである。

小説の作者からこの両小説の成立の前後を推定することが困難であれば、次に考えられる手立てとしては、現存本のうちの一番早く出版された版本の出版年を考察する方法があろう。

まず『西遊記』の最存最古の版本は、すでに述べた内閣文庫蔵の世徳堂本で、これには万暦壬辰（二十年）の序がある。よって遅くともこの万暦二十年までには、『西遊記』が成立していたと思われる。

では『封神演義』はどうか。やはり内閣文庫に現存最古の舒載陽明刊本があるが、残念なことに、冒頭に掲げられた李雲翔の序には何年に書かれたものか記されていない。だがかって孫楷第氏は、同じ内閣文庫に万暦庚申（四十七年）武林（杭州の旧称）の蔵珠館から出版された小説『唐伝演義』にも書林舒載陽梓と書かれてあることを発見され、このことから『封神演義』もこの『唐伝演義』と同じ万暦末年頃に刊行されたものであろうと推定された。[2] もしこの推定が的を得ているなら、『封神演義』は遅くとも万暦末年までには成立していたことになる。ところで、柳存仁氏の主張されるように、『封神演義』が『西遊記』より先に成立したとしたら、『封神演義』は世徳堂刊『西遊記』が出版された万暦二十年より前に出版されてなければならないが、現在までの所そのような版本は見つかっていない。

さて、いかなる小説も忽然として出現する事は考えられない。この『封神演義』もこれまで、中国古来の民間信仰の物語とか、先行の様々な小説を利用していることが考えられている。中でも『封神演義』が基づいたであろう先行小説として現在まで判明しているのは、元刊全相平話五種のうちの一つの「武王伐紂平話」と、余象斗刊『春秋列国志伝』巻一の両種がある。柳存仁氏も『封神演義』に先行する小説として『春秋列国志伝』を認めておられる。[3] ではこの余象斗編『春秋列国志伝』はいつ刊行されたかと言えば、名古屋の蓬左文庫にその巻頭に万暦丙午（三十四年）の余象斗の序のある三台館刊本があることから、当該本はこの年に刊行されたと思われる。だが当該本はまた重刊と銘打っているので、この年以前に刊行された原刊本があっ

たと思われるものの、まだその原刊本は見つかっていない。もし柳氏の主張されるように、『封神演義』が『西遊記』より早く成立していたとしたならば、『封神演義』の作者が参照したと思しい『春秋列国志伝』も、遅くとも世徳堂刊『西遊記』が登場した万暦二十年以前に出現していなければならないことになる。勿論、今は散佚してしまったが万暦二十年以前の古い『春秋列国志伝』の刊本があったのかもしれないが、常識的に考えて、柳氏の説には大部無理があるように思われる。

では、『西遊記』と『封神演義』の成立の前後を考える手立ては、果して以上の他に無いのであろうか。実は、これはこれまでも指摘されてきたことではあるが、『西遊記』には『封神演義』に共通して用いられている詩詞が少なからず見られる。このことは、どちらかが原作に付けられたもので、別のどちらかがそれを借用したものと考えるのが普通であろう。そして、その成立の早い原作に付けられた詩詞の場合は、その挿入のされ方が自然であり、対する後発の小説における詩詞の場合は、どうしてもその挿入のされ方に不自然さが見られることが予想される。

実は、既にこの方法によるこの両小説の成立の前後を考察された先行論文がある。それが徐朔方氏の「論『封神演義』的成書」と「再論『水滸伝』和『金瓶梅』不是個人創作」[4]である。本小考も、この徐氏の方法を踏襲するが、結論が若干異なるので、今回特にいささか私見を発表することとした。

二、

徐朔方氏は、まず『西遊記』と『封神演義』に共通する詩詞を二十例挙げられ、種々検討された結果、『西遊記』の方が原作とみられる例もある一方、逆に『封神演義』の方が原作と思われる例もあるとして、それぞれ若干例を挙げられている。結論としては、成立の早い作品の出現と流伝がかならずしも成立の遅い作品のそれとは限らず、その逆の可能性もあるので、『西遊記』と『封神演義』のうち、どちらが早くどちらが遅く成立したとは決められないというものである。

同氏の主張は、四大奇書を始めとする明代の小説の大半に個人創作と言えるものはなく、その小説が出版され世に登場するまでには、無数無名の人々の手を経て出来あがっているもので、最終的にその作品を書き整えた人間（これを、氏は〝写定者〟と称しておられる）の存在は想定できるものの、その人物を作者とは言いがたいとのこと。従って、これら明代の小説は出版に至るまで幾多の人の手を経る間に、様々な小説間で互いに影響しあっていることも考えられるので、この点からも、『西遊記』と『封神演義』の成立の前後を考えること自体あまり意味がないとされる。

確かに徐氏の主張されるように、四大奇書のうちでも比較的早く成立した『三国志演義』や『水滸伝』は、他の小説に大なり小なり様々な影響を与えている。或いは与えあっていることを否定するつもりはないが、しかし、あまりこの点のみを強調しすぎるのもいかがかと思われる。例えば『金瓶梅』のごときは、『水滸伝』中の武松・潘金蓬

物語に着想を得て全体百回の作品にまとめあげた個人を想定すべきであって、明代の小説ならすべて個人創作でないとするのはいかがかと思われる。

徐氏が挙げられた『西遊記』と『封神演義』に共通する詩詞は[5]、以下の通りである。尚、詩詞の表記は、冒頭の一句のみを表記する。（）は、『封神演義』で冒頭句が異っていることを示す。また、㊐は『西遊記』の略、㊥は『封神演義』の略である。以下同じ。

	詩詞の冒頭句	㊐の回数	㊥の回数
1	勢鎮汪洋	1回	43回
2	千峰排戟	〃	38回
3	観棋柯爛	〃	23回（登山過嶺）
4	烟霧散彩	〃	37回
5	黒烟漠々	16回	64回
6	烟霞渺々	17回	49回（烟霞裊々）
7	竹籬密々	18回	52回
8	揚塵播土	28回	58回
9	山頂嵯峨摩斗柄	36回	55回
10	瀟々灑々	41回	64回
11	重衾暖気	48回	88回
12	彤雲密布	〃	89回
13	嵯峨矗々	50回	45回
14	頂巓松柏接雲青	56回	59回
15	珍楼宝座	65回	63回（珍楼玉閣）
16	巨鎮東南	66回	58回
17	沖天占地	70回	63回
18	那山真好山	85回	61回
19	削峯掩映	86回	62回（高峰掩映）
20	頂摩霄漢中	98回	65回（頂摩霄漢）

私は以上に加えて、以下の16例を挙げたい。

	詩詞の冒頭句	㊐の回数	㊥の回数
21	大覚金仙没垢姿	1回	61回
22	初登上界	4回	12回
23	一天瑞靄光瑤曳	5回	45回
24	混元体正合先天	7回	78回
25	大仙赤脚棗梨香	〃	〃
26	烟籠鳳闕	10回	85回
27	烟波蕩々	28回	66回
28	巍々峻岭	32回	52回
29	湘々瀟々飛落葉	37回	54回
30	炎々烈々盈空燎	41回	71回
31	根源出処号幫泥	42回	83回
32	洋々光浸月	47回	88回
33	雲迷世界	61回	76回
34	冉々緑陰密	84回	62回
35	清和天気爽	96回	85回
36	功満行完宜沐浴	98回	71回

次に、以上の36例について、個々の詩詞の文句やその挿入のされ方を検討してみたい。

ところで実際に検討してみると、両作品の詩詞が大同小異であまり違いがなかったり、また、作中の筋立に添うよう微妙かつ巧妙に手を加えられているところが多く、正直言って今回どちらが原作でどちらがそれを借用したものか、判断に苦しむ例は少なくなかった。しかし、そうした判断しにくい中でも、借用された詩詞には、それなりの特徴があるように思われる。その第一は、これは当然のことだが、その詩

詞が挿入された場面にふさわしくない内容を有するもの。第二は、巧妙にその場面にふさわしいものに変えられているものの、恐らくその小説の編著者のミスであろうが、原作中に用いられた詩（詞）句をうっかりそのまま残し、その為にその詩詞がその作品の筋立てと合わず、結果不自然なものになっているもの、である。

三、

筆者の結論は、『西遊記』の方が原作で、『封神演義』の成立はそれより遅く、作中の詩詞の一部は『西遊記』から借用されたものであろうとするものなので、次にまず、徐朔方氏が、『封神演義』の方が原作で、『西遊記』のそれは借用ではないかとされた例について検討してみたい。

それは、以下の三例である。

一、6番の「烟霞渺々」の詞

『西遊記』では、この回で三蔵の袈裟が黒風山の妖怪（正体は熊羆の化けもの）によって盗まれるが、この詞は、その妖怪の住む洞府を描くもので、原文[6]は次の通り。

烟霞渺々、松栢森々。烟霞渺々采盈門、松栢森々青遶戸。橋踏枯槎木、峯巓繞薜蘿。鳥銜紅蕊来雲壑、鹿践芳叢上石台。那門前時催花発、風送花香。臨堤緑柳転黄鸝、傍岸夭桃翻粉蝶。雖然曠野不堪誇、却賽蓬莱山下景。

『封神演義』の方は、截教の仲間による「十絶陣」が闡教の仙人達によって破られるや、申公豹が三仙島に三仙姑の助力を頼みにゆく段で、この詞は、その三仙姑の住む洞窟を描写するもの。原文[7]は次の通り。

烟霞嬝々、松栢森々。烟霞嬝々瑞盈門、松栢森々青遶戸。橋踏枯槎木、峯巓繞薜蘿。鳥啣紅蕊来雲壑、鹿践芳叢上石苔。那門前時催花発、風送香浮。臨堤録柳転黄麗、傍岸夭桃翻粉蝶。雖然別是洞天景、勝似蓬莱閬苑佳。

御覧の通り、両小説に収められた詞は大同小異で、どちらもまるで仙境のような美しい洞窟を描く。徐氏は、このような内容の詞は、三女仙の住む洞窟にこそふさわしいが、『西遊記』のような熊羆の妖怪の住む洞窟の描写としてはふさわしくない。従って、『封神演義』の方が原作だろうとされる。だが、妖怪の住む洞窟が仙境のように美しく描かれてなぜ似つかわしくないのだろうか。むしろ仙境のように描くことによって、そこに住む妖怪に仙人と同等の能力があることを示しているとも考えられるのではあるまいか。紙面の関係で全文の引用は控えるが、例えば、『西遊記』六十回で三蔵ら一行の行く手を阻む牛魔王の住む摩雲洞を、「天台の仙洞に劣らず、海上の蓬瀛以上」と称し、大層美しく描かれている。

二、9番の「山頂嵯峨摩斗柄」の詞

『西遊記』では、この三十六回で三蔵ら一行が勅賜宝林寺という寺

に到着する。この詞は、その寺の建っているすばらしい山を描写したもので、次に原文を挙げるが、少々長いので、途中を省略させていただく。

山頂嵯峨摩斗柄、樹梢彷彿接雲霄。（中略）泉水飛流、寒気透人毛髪冷。巔峰屹崣、清風射眼夢魂驚。時聴大蟲哮吼、毎聞山鳥時鳴。（中略）獐犯結党、尋野食前後奔跑。竚立草坡、一望並無客旅。行来深凹、四辺倶有豺狼。応非仏祖修行処、尽是飛禽走獣場。

一方『封神演義』の方は、この回で楊戩（ヨウセン）が土遁術を使って龍吉公主の住む夾龍山にやってくるが、この詞もその山のすばらしさを描いたもの。やはり原文は長いので、途中省略するが、次の通り。

山頂嵯峨摩斗柄、樹梢彷彿接雲霄。（中略）流水（ママ）清流、陣々異香忻馥々。巔峰彩色、飄々隠現白雲飛。時見大蟲来往、毎聞山鳥声鳴。麂鹿成群、穿荆棘往来跳躍。玄猿出入、盤溪澗摘菓攀桃。竚立草坡一望、并無人走。行来深凹、倶是採薬仙童。不是凡塵行楽地、賽過蓬莱第一峰。

この両小説の詞も、若干の文字上の相違はあるものの大同小異で、どちらも好きな山を描写したものである。徐氏は、『封神演義』に見える詞は龍吉公主の住む山としてふさわしいものと言えるが、『西遊記』の方は、勅賜寺のある山としては、末句の「応非仏祖修行処、尽是飛禽走獣場」とあるのは合わない。よって、『封神演義』が原作で、『西遊記』の詞はそれを借用したものと断じておられる。しかし『西遊記』の当該部分は、「応に仏祖修行の処に非ざれば、尽く是れ飛禽走獣の場たるべし」と読め、かつて仏が修行された所なので、このように掃除が行き届いているぐらいの意味なのであって、この句のどこが前後不照応なのかさっぱり分らない。よしや徐氏の言われるように、『封神演義』の方が原作ならば、『西遊記』でなにも最後の一句をこのように改めずに、『封神演義』の「不是凡塵行楽地、賽過蓬莱第一峰（この世の行楽の地なぞではなく、その荘厳さは蓬莱第一峰以上だ）のままでもよかったはずである。[8]

三、11番の「重衾無暖気」の詩

『西遊記』では、三蔵ら一行が通天河近くの陳家荘に泊った折のこと、この詩は、厳寒の頃なので、一行が寝ていても寒いことを叙したもの。原文は次の通り。

重衾無煖（ママ）気、袖手似揣氷。此時敗葉垂霜蕊、蒼松掛凍鈴。地裂因寒甚、池平為水凝。漁舟不見叟、山寺怎逢僧。樵子愁柴少、王孫喜炭増。征人鬚似鉄、詩客筆如菱。皮襖猶嫌薄、貂裘尚恨軽。蒲団僵老衲、紙帳旅魂驚。繡被重裀褥、渾身戦抖鈴。

対する『封神演義』では八十八回に見え、この詩は、東征軍が孟津附近まで到着した時、折からの厳寒に兵士達が震える様を叙したもの

で、原文は以下の通り。

重衾無暖気、袖手似揣氷。敗葉垂霜蕊、蒼松掛凍鈴。地裂因寒甚、池平為水凝。魚舟空釣線、仙観没人行。樵子愁柴少、王孫喜炭増。征人鬚似鉄、詩客筆如零。皮襖猶嫌薄、貂裘尚恨軽。蒲団僵老納（ママ）、紙帳旅魂驚。莫訝寒威重、兵行令若霆。

徐氏は、『西遊記』の末句「繡被重裀褥、渾身戦抖鈴」を問題にされ、この両句は三蔵ら一行にはふさわしくない不自然な描写なので、『封神演義』原作、『西遊記』を模擬作とした。[9] たぶん氏は、「繡被」（刺繡をした掛け布団）で夜具を重ねるとあるあたりが、平素より貧乏布団にくるまって旅をつづける三蔵一行にふさわしくないとされたと思うが、[10] しかし、ここは「たとえ繡被を夜具として重ねたとしても、渾身の震えは鈴のよう」の意味ともとれるので、不自然な描写とまでは言えまい。『西遊記』も『封神演義』も、単に厳寒時の寒さを詠んだ詩でよいのではないか。

以上の三例は、徐氏が『封神演義』の方が原作で、『西遊記』のそれは踏襲作として挙げられた例であるが、今見たように、いずれも充分な根拠に基づくものとは思われない。

四、

では次に、『西遊記』と『封神演義』に共通する詩詞のうち、『西遊記』の方が原作と考えられる例を見てみよう。

一、2番の「千峯排戟」の詞

『西遊記』では、孫悟空に仙術を授ける須菩提祖師の住む霊台方寸山の描写に使われ、原文は以下の通り。

千峯排戟、万仞開屏。日映嵐光軽鎖翠、雨収黛色冷含青。瘦藤纏老樹、古渡界幽程。奇花瑞草、修行喬松。修竹喬松、万載常青欺福地。奇花瑞草、四時不謝賽蓬瀛。幽鳥啼声近、源泉響溜清。重々谷壑芝蘭繞、処々巉崖苔蘚生。起伏巒頭龍脈好、必有高人隠姓名。

『封神演義』の方は、毘崙山に呼びだされ、元始天尊より封神の任務が与えられた姜子牙が西岐に戻る途中、海上のある島に立ち寄る。この詞は、その島の中の山の形容に使われている。その島では、姜子牙の肉を食べると千年寿命が延びると信ずる妖怪の龍須虎がいるが、姜子牙はこれをうち負かし、最終的には自分の弟子として封神事業に従事させることとなる。原文は以下の通り。

千峯排戟、万仞開屏。日映嵐光軽嶺外、雨収岱色冷含煙。藤纏老樹、雀占危岩、奇花瑤草、脩竹喬松。幽鳥啼声近、滔々海浪鳴。重々谷壑芝蘭繞、処々巉崖苔蘇生。起伏巒頭龍脈好、必有高人隠姓名。

さてこの詞のうち、問題となるのが、末句の「必ずや高人の姓名を隠せるあらん」であろう。これは『西遊記』の須菩提祖師こそふさわしい形容で、とても姜子牙の肉をねらう妖怪の龍須虎には似つかわしくない。よってこの詞は、『西遊記』の方が原作と考えるべきである。

二、23番の「一天瑞靄光瑤曳」の詩

『西遊記』の詩は、これから天界の蟠桃会に招待されてその会場に赴こうとする赤脚大仙のことを描くもの。原文は以下の通り。

一天瑞靄光揺拽、五色祥雲飛不絶。白鶴声鳴振九皐、紫芝色秀分千葉。中間現出一尊仙、相貌昂然丰采別。神舞虹霓幌漢霄、腰懸宝籙無生滅。名称赤脚大羅仙、特赴蟠桃添寿節。

一方『封神演義』の方は、金鰲島の十人の仙人による「十絶陣」を破る為に、西方インドからやって来て闡教の神仙達に加勢する燃灯道人を描くもので、原文は以下の通り。

一天瑞彩光揺拽、五色祥雲飛不徹。鹿鳴空内九皐声、紫芝色秀千層葉。中間現出真人相、古怪容顔原自別。神舞虹霓透漢霄、腰懸宝録無生滅。霊鷲山上号燃燈、時赴蟠桃添寿域。

御覧の通り末の両句は、『西遊記』では「名は赤脚大羅仙と称し、特に蟠桃に赴き、寿節に添わんとす（寿を祝う席に出席しようとする）」とするのに対し、『封神演義』では、「霊鷲山上に燃燈と号し、時に蟠桃に赴き、寿域を添えたり（寿命の域を延ばす）」となっている。しかし、『封神演義』におけるこの燈灯道人は、蟠桃とは関係がなく、蟠桃会にも赴いていないのである。折角「霊鷲山下に云々」などといかにもインドの古仏らしく書いているのに、うっかり『西遊記』の「赴蟠桃」の三字を書き残したものと思われる。従って、『西遊記』の方を原作とすべきである。

三、24番の「混元体正合先天」の詩

『西遊記』の方は、天界の暴れ者の孫悟空を捕えた太上老君が、悟空を八卦炉の中に投げ込み三昧火でその体を灰にしてしまおうとする。だが不死身の悟空は炉中で焼かれても死なず、四十九日目にとうとう炉中より飛び出る。この詩はそこで挿入されているもので、原文は以下の通り。

混元体正合先天、万刼千番只自然。渺々無為渾太乙、如々不動号初玄。炉中久煉非鉛汞、物外長生是本仙。変化無窮還変化、三皈五戒總休言。

一方『封神演義』の方は、紂王を伐つべく孟津に集まった兵士達に、それまで紂王をかばってきた截教の通天教主が「誅仙陣」を布いて最後の抵抗する。この話はこの時通天教主が歌う詩として使われ、その原文は以下の通り。

混元正体合先天、万刼千番只自然。渺々無為伝大法、如々不動

号初玄。炉中久煉全非汞、物外長生尽属乾。変化無窮還変化、西方仏事属逃禅。

この両作品の詩には微妙に異なる所があるが、中でも、『西遊記』の「炉中久煉非鉛汞」（炉中久しく煉るに鉛汞のみに非ず）、『封神演義』の「炉中久煉全非汞」（炉中久しく煉るは全て汞のみに非ず）の一句に注目したい。意味的には、どちらも変らず「炉中で煉ろうとしたのは鉛や水銀のみでなく（孫悟空だった）」ということである。これは正に『西遊記』の詩句であって、『封神演義』中の通天教主のせりふとしてはふさわしくないことは明らかである。これも、『封神演義』の編著者がうっかり『西遊記』中の詩句を書き残してしまった箇所であろう。

四、25番の「大仙赤脚棗梨香」の詩

『西遊記』では、釈迦が孫悟空を五行山下に取り押さえるや、赤脚大仙が釈迦にお礼として、交梨二個と火棗数個を差し出す。この詩は、その直後につけられているもので、原文は以下の通り。

大仙赤脚棗梨香、敬献弥陀寿算長。七宝蓮台山様穏、千金花座錦般粧。寿同天地言非謬、福比洪波話豈狂。福寿如期真个是、清閑極楽那西方。

『封神演義』の方は、通天教主の「誅仙陣」にほとほと手を焼いた元始天尊が、インドから助太刀としてやってきた接引（ショウイン）（菩薩が人々を浄土に導く）道人を迎える時歌う詩で、原文は以下の通り。

大仙赤脚棗梨香、足踏祥雲更異常、十二蓮台演法宝、八徳池辺現白光。寿同天地言非謬、福比洪波語豈狂。修成舎利名胎息、清閑極楽是西方。

『封神演義』で問題なのは、冒頭の一句が『西遊記』と同じく「大仙赤脚棗梨香」となっていることである。ここは元始天尊を赤脚大仙に、接引道人を釈迦にそれぞれ見立てたと考えられないわけではないがいささか無理がある。この場面では棗や梨はでてこないのだからやはり関係ないとすべきであろう。本来ならこの一句を何か別の句に変えるべきだった。つまり、この詩も『西遊記』原作と判断すべき例である。

五、15番の「珍楼宝座」の詞

『西遊記』は、三蔵ら一行を待ち構える妖怪のすむ偽りの雪音寺を描く詞で、原文は以下の通り、

珍楼宝座、上刹名方。谷虚繁地籟、境寂散天香。青松帯雨遮高閣、翠竹留雲護講堂。霞光縹緲龍宮顯、彩色飄颻沙界長。木欄玉戸、画棟雕梁。談経香満座、語籙月当窓。鳥啼丹樹内、鶴飲石泉傍。四圍花発琪園秀、三面門開舎衛光。楼台突兀門迎嶂、鐘磬虚徐声韻長。窓開風細、簾巻（ママ）烟范。有僧情散淡、無俗意和昌。紅塵不到真仙境、静土招提好道場。

一方『封神演義』の方は、紂王のさしむけた妖怪で、いくらその首を刎ねてもまた首が元に戻る馬善に、東征軍はさんざん手こずる。そこで、楊戩がこの馬善の正体を探るべく、燃灯道人の棲む崑崙山に赴く。この詞はその崑崙山を描く。原文は以下の通り。

珍楼玉閣、上届崑崙。谷虚繁地籟、境寂散天香。青松帯雨遮高閣、翠竹依稀両道傍。霞光縹緲、釆色飄々。朱欄碧檻、画棟雕簷。談経香満座、静閉月当窓。鳥鳴丹樹内、鶴飲石泉傍。四時不泄奇花草、金殿門開射赤光。楼台隠現祥雲裡、玉磬金鐘声韻長。珠簾半捲、炉内烟香。講動黄庭方入聖、万仙總領鎮来方。

この両詞を比較すると大分異なるが、中頃に見える「談経香満座（談経の香座に満つ）」の一句は共通する。問題なのは「談経」の二字である。これは明らかに仏教用語で、ひょっとしたら道教でも使うのかもしれないが、私は寡聞にして知らない。偽りの寺とはいえ有名な仏教の寺院についてこの語が用いられているのは自然だが、『封神演義』における道教の聖地崑崙山について、この語が用いられているのは、いささか違和感を感じる。

六、36番の「功満行完宜沐浴」の詩

『西遊記』の方は、三蔵ら一行が、遂に霊鷲山（リョウジュセン）を目の前にし、沐浴して身を清める一段で挿入された七言詩で、原文は以下の通り。

功満行完宜沐浴、煉馴本性合天真。千辛万苦今方息、九戒三皈始自新。魔尽果然登仏地、災消故得見沙門。洗塵滌垢全無染、反本還原不壊身。

一方『封神演義』の方は、東征軍が孔宣の使う神光にさんざん手こずるが、これまたインドから準提道人がやって来て孔宣を打ち負す。神光の正体は孔雀であることが判明するが、準提道人が孔宣に戦いを挑む時にこの詩を歌う。原文は以下の通り。

功満行完宜沐浴、煉成本性合天真。天開于子方成道、九戒三皈始自新。脱却羽毛帰極楽、超出凡籠養百神。洗塵滌垢全無染、返本還元不壊身。

『封神演義』の詩の問題点は明らかで、冒頭の一句「功満ち行完（はた）せば、宜しく沐浴すべし」は、まったくこの状況に合わない。これに対し『西遊記』の方は、まったくこの筋展開に符合するものである。これも『封神演義』の編著者が、本来ならもっとふさわしいものに書き改めるべきところを見落した為におこった不自然さであろう。

七、20番の「頂摩霄漢中」の詞

『西遊記』は、霊山頂上に聳える雷音寺の偉容を描いたもの。原文は以下の通り。

頂摩霄漢中、根接須弥脉。功峯排列、怪石参差。懸崖下瑶草琪花、曲徑傍紫芝香蕙。仙猿摘果入桃林、却似火焼金。白鶴棲松立

枝頭、渾如烟棒玉。彩鳳双々、青鸞対々。彩鳳双々、向日一鳴天下瑞。青鸞対々、迎風耀舞世間稀。又見那黄森々金瓦叠鴛鴦、明幌々花磚鋪瑪瑙。東一行、西一行、尽都是蕊宮珠闕。南一帯、北一帯、看不了宝閣珍楼。天王殿上放霞光、護法堂前噴紫焔。浮屠塔顕、優鉢花香。

対する『封神演義』の方は、紂王側に寝返った殷郊の持つ番天印に東征軍は手も足も出ない。そこで広成子が天界瑤池のほとりにすむ南極仙翁の所にゆき、聚仙旗という「宝貝」を借りてくる。この詞は、その瑤池を描く。

頂摩霄漢、脈挿須弥。功峰排列、怪石参差。懸崖下瑤草琪花、曲径傍紫芝香蕙。仙猿摘果入桃林、却似火焔焼金。白鶴棲松立枝頭、渾如蒼烟捧玉。彩鳳双々、青鸞対々。彩鳳双々、向日一鳴天下瑞。青鸞対々、迎風耀舞世間稀。又見黄鄧々瑠璃瓦叠鴛鴦、明幌幌錦花磚鋪瑪瑙。東一行、西一行。尽是蕊宮珍闕。南一帯、北一帯。看不了宝閣瓊楼。雲光殿上長金霞、聚仙亭下生紫霧。

『西遊記』では、雷音寺を仏教の聖地としている。一方『封神演義』に描かれる瑤池は道教の聖地である。問題は、『西遊記』の「根接須弥脈（根は須弥の脈に接す）」と、『封神演義』の「脈挿須弥（脈は須弥を挿す）」の両句である。この点については、すでに徐朔方氏も指摘されている通り、須弥山は、仏教の宇宙観における世界の中央に聳える山の名前で、当然『封神演義』における道教の聖地たる瑤池の形容にはふさわしくない。つまり『西遊記』の詞が原作で、『封神演義』でうっかりこの一語を書き残したのであろう。

ただ、15番の詞中の「談経」や、この詞中の「須弥」については、『西遊記』や『封神演義』が出現した明末に、儒仏道三教を安易に混合する風潮があったことを考えるならば、これらを以て『西遊記』の方が原作だと断ずるのは早計かもしれない。

しかし今回とりあえず、以上の2・15・20・23・24・25・36の七例について、『西遊記』の方を原作、『封神演義』はそれを借用したと考えるものとする。

五、

以上、『西遊記』と『封神演義』に共通する詩詞から、この両作品の成立の先後を推定してみたが、これに付随して考えられることを次に二点ばかり指摘しておきたい。

その一は、すでに見た2番の詞「千峯排戟」の所でも触れたが、『封神演義』で、修業を積んだ人の肉を食べると寿命が延びることを耳にした龍鬚虎という妖怪が、姜子牙に襲いかかるが、これは明らかに、『西遊記』において三蔵の肉をねらって次々と現われる妖怪達[1]の焼き直しと考えられる。それら妖怪達の間では、三蔵は金蟬長老の化身で、その肉を食べると不老長寿が得られると信ぜられていた。

その二は、すでに見た23番の詩で登場する燃灯道人、25番の詩で登

場する接引道人、36番の詩で登場する準堤道人についてである。彼等はいずれも、東征軍の兵士達とこれを加勢する闡教の神仙達が、さんざん手を焼く截教の神仙や妖怪達に対して、西方インドから来て助けその難局を打開する神仙である。

これも明らかに、『西遊記』第七回で、天界を暴れまわって誰の手にもおえなくなった孫悟空を、最終的に西方インドの釈迦が取り押さえるという展開の焼き直しと考えるべきであって、その逆、つまり『西遊記』の作者が、『封神演義』中の燃灯道人や接引道人さらに準堤道人を見て、これに着想を得て釈迦が孫悟空を五行山に閉じ込めるにしたとは考えにくい。

私は、以上のこともまた、『西遊記』が原作で、『封神演義』はその作中で詩詞を借用したり筋展開をまねたりしたものであることの傍証たりうると考えるものである。

六、

最後に、『封神演義』の編著者が、『西遊記』から詩詞を借用するにあたり、ある傾向のあることを指摘しておきたい。

次の表は、『封神演義』において、『西遊記』の何回からどれだけ引用されているかを示したものである。但し表中にある㊥は、『西遊記』の略、㊫は『封神演義』の略である。

㊥の回数	㊫の引用数	㊥の回数	㊫の引用数
1	5	47	1
4	1	48	2
5	1	50	1
7	2	56	1
10	1	61	1
16	1	65	1
17	1	66	1
18	1	70	1
28	2	84	1
32	1	85	1
36	1	86	1
37	1	96	1
41	2	98	2
42	1		

これで見ると、『西遊記』の一回から多く引用されていることがわかる。

では、『西遊記』からの詩詞が、『封神演義』の何回にどれだけ引用されているのであろうか。それを示したのが、次の表である。

㊫の回数	㊥の引用数	㊫の回数	㊥の引用数
12	1	62	2
23	1	63	2
37	1	64	2
38	1	65	1
43	1	66	1
45	2	71	2
49	1	76	1

61	2	89
59	1	88
58	1	85
55	2	83
54	1	78
52	2	1
		2
		2
		1
		2

これに依れば、『封神演義』の五十八回から六十六回にかけて集中的に引用されていることがわかる。具体的に言うとここは、師匠の赤松子の期待に反して、朝歌側に加勢して、西岐側をさんざん苦しめる殷洪の一段に相当する。

また『西遊記』と同様に、『封神演義』の編著者が参照したと考えられている『春秋列国志伝』巻一からも詩詞の借用のあったことがこれまでに判明している。

では次に、『封神演義』の何回にどのような詩詞が『春秋列国志伝』から借用されているか、ついでながら見てみたのが、次の表である。但し、表中の㊥は、『春秋列国志伝』の略である。

	詩詞の冒頭句	㊥の巻数	㊫の回数
1	妖気穢乱宮庭	1	6
2	七載艱難羑里城	1	11
3	明君作兮	1	19
4	憶昔成湯掃桀時	1	24
5	鳳非之兮麟非無	1	24
6	春水悠々春草奇	1	24
7	宰割山河布遠猷	1	24
8	求賢遠出到溪頭	1	24
9	渭水溪頭一釣竿	1	（類）24
10	台高挿漢		25

これを見れば一目瞭然、『封神演義』の二十四回の文王が釣をしている姜子牙に出会う場面に使われていることがわかる。

『封神演義』の二十四回に多く『春秋列国志伝』からの詩詞が引用されているのは、そもそも『春秋列国志伝』に比較的多く文王と姜子牙の出会いを詠んだ詩詞が多かった為であろう。だが何故『封神演義』の五十八回から六十六回までの殷洪の一段に、『西遊記』からの引用詩詞が集中しているのかわからない。

ま と め

まこと、研究者にとって、明代白話小説の作者と成立年代を考えることは、難中の難事である。第一、四大奇書を始めとして、明代のほとんどの小説の真の作者名が明らかになっていない。では何故作者名が明らかにならないかと言えば、一つには、そもそも白話小説は伝統的詩文を作る文人が筆を執る対象ではないと考えられていた為である。従って大部分の小説は、二流三流の人々が筆を執って書いた為に、作者の素姓を知ることが困難となっている。よしや一流の文人が筆を執ったとしても、自ら白話小説の作者であることを恥じた為、ペンネームなどを使って世間を韜晦し、その真の姓名が世に知られないようにしている。

更に困ることは、当時は今の著作権のような概念はなかったので、極端なことを言えば、その小説が出版されるごとに、出版元の方で作品本文に勝手に手が加えられることがあったことである。結果、どこまでが原作で、どこからが手の入った部分かは、後世になるとさっぱり分らなくなる。これも真の作者名をつきとめることを困難にしている深刻な事情である。

更に、伝統的詩文の場合は、文人が自らの名誉の為に持てる文才を最大限傾むけて発表するのに対し、白話小説の場合は、ただおもしろくて、その作品がよく売れさえすればよい、つまりお金の為に書いている。これも作者名が明らかにならない理由である。このように白話小説の作者穿鑿は困難を極める。

ところが、小説の成立年代の追求は更に難しい。第一明代に出版された白話小説のすべてが現代まで残っている保証はほとんどない。この度扱った『西遊記』と『封神演義』の善本のすべてが我が国の内閣文庫に蔵せられていたことを以ってしても、このことが充分に考えられる。つまり、清朝以前の旧中国にあっては、白話小説が書籍として大切に保管されることなく、まるで今の週刊誌のように読んでしまったら捨てられることが多かったようである。従って、これまで中国ですでに散佚して亡んでしまった白話小説がどれだけあるかわからない。たとえば、『西遊記』に今日すでに幾多の版本のあることが知られるが、それでも散佚して今日に伝わらぬ別の版本がなかったとはいえず、もしそうした版本が今日に伝わっていたなら、ことと次第によったら小説『西遊記』の成立年代ももっと古くに遡らせることも大いに考えられるのである。

すでに小説の成立年代の追求が困難となれば、ある二つの白話小説のうちの、どちらかが別のどちらかに何らかの影響を与えたかどうかという追求も、これまた困難となる。

更に、徐朔方氏も指摘されるように、成立年代がかりにわかったとしても、かならずしも成立の早い作品が世間への流伝も早く、成立の遅い作品に必ず種々の影響を与えるとは限らないということも充分考えられるのである。

以上のように、白話小説にはやっかいな問題が少くない。しかし今回は、特に『西遊記』と『封神演義』に共通する詩詞にのみ絞って検討を加えることとした。その結果、『西遊記』の詩詞が『封神演義』のそれに影響を与えたものであろうとの結論に達した。明代のその他の小説との相互関係の考察については、今後の課題としたい。

〔注〕

(1)柳存仁「毘沙門天王父子与中国小説之関係」一九五八年（『和風堂文集』所収）

(2)孫楷第『日本東京所見中国小説書目』一九三二年

(3)柳存仁「元至治本全相武王伐紂平話明刊本列国志伝巻一与封神演義之関係」一九五九年（『和風堂文集』所収）

(4)ともに、徐朔方『小説考信編』一九九七年上海古籍出版社刊に収められている。

(5)徐朔方「再論『水滸伝』和『金瓶梅』不是個人創作」に挙げられている。

(6)『西遊記』の原文は、基本的には内閣文庫蔵世徳堂本に依った。以下

の引用はすべてこれによる。但し、不鮮明な箇所に関しては、李洪甫整理校注『西遊記整理校注本』二〇一三年十月人民出版社を参照した。

(7)『封神演義』の原文は、すべて内閣文庫蔵舒載陽刊本に依った。以下の引用はすべてこれによる。

(8)以上の二例は、徐朔方上掲論文（注(5)）による。

(9)徐朔方「論『封神演義』的成書」による。

(10)李卓吾批評本『西遊記』にも、この詩讃に、「不通之極、可笑」という評がついている。

(11)二十七回の白骨夫人、三十二回から三十五回にかけての金角・銀角、四十回から四十二回にかけての紅孩児などが挙げられる。

（あらき　たけし　中国学科）

二〇一七年十月二十三日受理